



丹後は、京都府の最北部に位置し、日本海に向かって伸びている丹後半島を中心に、東は舞鶴市、西は兵庫県豊岡市、南は福知山市、大江町、兵庫県但東町に接する面積約840km²の地域である。半島の東と西には、それぞれに長大な砂嘴を持つ宮津湾と久美浜湾があり、南には大江山連峰、中央には東北から西南に斜に伸びた丹後山地が連なり、東から権現山、太鼓山、依遅ヶ尾山、金剛童子山、磯砂山など、標高500m～700mの頂を持ち、その中央部を竹野川が流れる。経ヶ岬を北端として半島の東西を囲む総延長約300kmに及ぶ海岸線は、東側の急崖の続く断層海岸やリアス式海岸に対する白砂のロングビーチなど変化に富み、京丹後市網野町を境に、東側は若狭湾国定公園、西側は山陰海岸国立公園に指定されている。また、平野部は、北近畿最大の由良川をはじめ、大手川、野田川、竹野川、福田川、佐濃谷川、川上谷川などの流域や海岸沿いに分布している。



▲依遅ヶ尾山

気候は、四季の変化に富んだ日本海型気候であり、夏は気温が高い日が続き、晩秋から冬にかけて「浦西」といわれる北西または西よりの季節風とそれに伴う時雨現象となり、不安定な天候となる。冬季には、平野部でも50cm、山間部では1mを越す積雪がみられることもある。



▲経ヶ岬

丹後に人が住み始めたのは約1万年以上も前と推定されており、約2,000年前の弥生時代には、京丹後市久美浜町の函石浜遺跡で、中国の「新」の時代の貨泉が発見されたように、大陸や朝鮮との交流が活発に行われていたと考えられる。また、3世紀後半からの古墳時代の遺跡として、日本海側最大の京丹後市丹後町神明山古墳、同網野町銚子山古墳、加悦町蛭子山古墳などをはじめ5,000基以上の古墳や貴重な遺跡などが数多く分布し、丹後は、いわゆる「丹後王国」と言われるように、「大和朝廷」に比肩する独自の繁栄を遂げていたとみられる。

記録では、奈良時代の713年に丹波国から分かれ丹後国として独立し、天橋立を望む現宮津市に国分寺が置かれた。鎌倉時代の丹後半島一帯は、京都守護職（後の六波羅探題）の管轄となり、室町、安土桃山時代を経て、江戸時代に入ると、宮津藩、峰山藩と田辺藩（現在の舞鶴市）の三藩に分割され、さらに江戸中期以降は、幕府の天領として久美浜代官所が置かれている。明治維新の一時期には、久美浜県が先に置かれ、廃藩置

県による宮津県、峰山県、舞鶴県を経て、1876年には京都府に統合された。現在は、2004年（平成16年）4月の合併により新市として誕生した京丹後市と宮津市、加悦町、岩滝町、伊根町、野田川町の2市4町で構成されている。

地理的には、京阪神から概ね100km圏内にあり、京阪神と結ぶ京都縦貫自動車道（久御山町～宮津市）と近畿自動車道敦賀線があるが、このうち前者は、「綾部～宮津間」と「京都丹波～京都間」で供用開始されている。また日本海側を鳥取まで結ぶ鳥取豊岡宮津自動車道では、宮津～野田川間の工事が進められている。更に、地域では、国道176号、178号、312号、482号とこれにアクセスする地方道が主要な道路交通体系となり、これに加えて第3セクターの北近畿タンゴ鉄道宮津線がほぼ東西を横断し兵庫県豊岡市と舞鶴市を結び、宮福線が宮津市と福知山市を結んでいる。

丹後の人口は、2000年（平成12年）に117,559人であり、長期的な人口減少と高齢化が進み、1970年（昭和45年）の140,186人から16%の減、65歳以上の人口比率は、この間に11%から26%に上昇した。主な産業は農林水産業、織物業、機械金属業、観光業などであり、就業者数は、その約半数が第3次産業で、年々増加する傾向にある。これに対して第2次、第1次産業の就業者は、年々減少の傾向にあり、それぞれ約39%、9%となっているが、府平均より依然として高い。

主な産業の動向をみると、農業では、農家戸数約7,000戸、過去30年間で半減したが、農業粗生産額は114億円（平成12年）で30年前に比べて約60%増となっている。近年、京野菜などの園芸作物の生産が増加しているものの、全体としては稲作を中心とした兼業経営が多い。なお、平成14年度に完了した国営農地開発事業により、宮津市と京丹後市合計で53団地約500haの農地で、飼料作物、葉たばこ、加工契約野菜、果樹等が栽培されている。

森林面積は、約64,000haで総面積の約75%を占め、その大半が民有林で、人工林率は府内平均を下回り、経営規模は零細で農業や他産業との複合的な経営が大半となっている。平成15年度の林業粗生産額（素材、樹苗、特用林産物等）は約1億5千万円で、素材は、主に京都丹州木材市場や兵庫県市場に出荷されている。

沿岸には、天然礁が散在し恵まれた漁場があり、四季を通じて多くの魚介類が水揚げされている。特に、「間人ガニ^{たいざ}」は、漁場が近いことから新鮮なズワイガニとして、有数の高級ブランドとなっており、また久美浜湾では、カキの養殖が、栗田湾、宮津湾などでは、トリガイやイワガキなど新たな養殖の試みが行われている。

和装需要の長期にわたる減少傾向のもとにあるが、今なお年間百万反を超える白生地を生産し、「丹後ちりめん」をはじめとする絹織物の産地としては全国一の規模であり、また、かつて織物にも関係していた機械金属業は、今や自動車やIT関連の部品生産にシフトし、地域を支える重要な産業となっている。また、商業では、スーパー形式の小

売店舗に加えて、交通利便性の高い地域には、大規模店舗の立地も進んでいる。

日本三景「天橋立」をはじめ、日本海に面した由良、奈具海岸や経ヶ岬、琴引浜、小天橋などの景勝地、伊根の舟屋、古墳公園やちりめん街道など多くの観光資源に恵まれ、夏は海水浴客が、冬は「かに」を求めて多くの人を訪れ、丹後全体で年間約630万人の観光入込客がある。また、丹後の各地域では、伝統的な季節の行祭事なども多く、また他方では、地域おこしを目的とするイベントやスポーツ競技、更に新たに整備された施設では、文化芸術関係の展示、発表なども行われている。



▲ちりめん街道

丹後を長く支えてきた基盤は、農林水産業と機業であった。戦後、急速に進んだ我が国の産業構造の変化と経済成長の過程で、丹後からも多くの若者が、新たな就業機会を生み出した第2次・第3次産業が集中する都市部へ流出していった。この間、機業は国民所得の向上を背景とする着物ブームの中で西陣・友禅の間屋と連動して生産を拡大し、丹後の経済力の維持に大きな役割を果たしてきた。しかし、長期的に低減する和装需要と主流である家内工業的な生産体制のもとでは、丹後全体の基幹となる就業の機会を提供するには至らず、人口の減少と高齢化は進んだ。

しかし、構造的な変化が進む中で、農林水産業においても機業においても、新たな経済環境に対応した様々な工夫が続けられており、また製造業では新分野に挑戦してきた機械金属業が独自の集積を築き、観光・レクリエーション関連では全国的に知られた天橋立を軸に、海水浴、カニ、温泉とその分野を広げてきた。これらはすべて、明日に向けての丹後の貴重な資源となっている。

これらを生かして丹後の魅力を開花させるためには、地域の中での努力とともに、より多くの人々が丹後に関わりを持ち、その中から新たな活動の芽をつくっていくことが必要である。このため、このプランでは、まずそれ自身、域外との交流を要素とし、世界的にもこれからの主要な産業分野とみられ、丹後がその大きな可能性を持ち、他の産業等との関連も深い観光・レクリエーションを最初に取り上げ、次いで農林水産業、織物・機械金属業等地域産業、そして生活・地域づくりに関係する事柄をテーマとし、最後にこれら全体を支えうる主要な基礎条件に触れることとしている。